

「はい、こちらシャワー室前でーすw

只今、撮影前という事でシャワーを浴びてもらってるんですが……」

Io sono
prigioniera~
今夜貴方ほ~♪

「呑気に鼻歌なんて歌ってるみたいですので、扉開けてみましょうw」



「えっ……何ですか？ あっ、撮影しているんですか？」

「はい撮ってまーすw

「恒例のシャワーインタビューの時間でーす」

「えええ………」でインタビューするんですかw



「その通りでーすw ダメなの？」

「ダメっていうか……恥ずかしいんですけど」

「それが目的でーすw」

「それじゃまず、経験人数から教えてくださーい！」



「えーと…… エルフとは、一人ですね」

「何その言い方w」

「それ以外は何人いるんですかw」

「人間の方も含めると…… うっん……」



「悩むほどの事なのW マジお姉さん超エッチじゃんWWW」

「あ、いえ、昔の事まで思い出して……」

「そんな忘れるほど昔じゃないでしょW
それとも経験が早かったとか。」

「あ。それじゃあ、初体験はいつかな〜?」



「初めてですが、それなら覚えてますよ。」

ええっと、九十五年前、蒼暮の月の時に……」

「なにそのポケｗｗ

お姉さん真面目そうなのにウケルｗｗ」

「ポケ……？」



「OKOK、秘密って事ねw それにしてもお姉さん、ホントイイ体してるよね」
「ふふ、ありがとうございます」

「おっぱいとかデカイし柔らかさそう」
「うふふ。あとでいっぱい触ってくださいね」



「お姉さんのおっぱい、今すぐ触りたいなあ〜」

「え、今ですか？」

「カメラの向こうの視聴者さんも
きつと早く揉めと〜ってますよw」

「ええ〜……w まあいいですけど」



「うほお……でっか！ やわらか！ マジでヤバいんだけど！」

「あはは……」

「ちよつと興奮しすぎじゃないですかw」

「いやーこんなの最高でしょ、」

「すげー触り心地イイからずっと揉んでたいわ〜」



「んっ…… ちょっと、触り方がいやらしくないですか」

「やらしくしてるんでw おっぱいは感じる方？」

「感じますね……んっ……」

「どっちらへんが感じるの？」

「全体を揉まれたりすると、すっく……」



「えーマジw じゃあめっちゃ揉んどじやろよ」

「んっ。あん……」

「はあく柔らかいなあ。乳首は感じる？」

「はい……感じすぎちゃいますね……」

「おっ、じゃあ試しちゃおうかな」



「あっ、それダメ……んっ……やあ……「フリフリ」ちゃダメ……」

「めちゃめちゃ感じてるじゃん。

乳首弱いの?」

「弱い……です……んっ……」

「あくすっげえ固くなってるねえ……」



「ちょっと俺、もうガマン出来ないわ。早くシャワー浴びて出まじよう！」

「えー、そっちからインタビューとが言い出したんですけどw」

「ハハハ。ささ、早く早く。
もうこっち、ビンビンなんで」

「は〜い。それじゃベッドで」

「あくもうメチャクチャ楽しみだわ〜 これ絶対濃いの出るわ〜」





Io sono
Prigioniera~
今夜貴方ほ~♪































Io sono
Prigioniera~
今夜貴方ほ~♪